乳幼児教育相談における保護者支援（３）

～子どもの成長を支える親子の関わり～

山中　健二・土手　信・佐藤　文昭・杉本　真美・桑原　美和子

聴覚に障害のある乳幼児にとって、最も身近な存在である保護者との関わりがコミュニケーションや言葉の育ちを支えるものとなる。本校乳幼児教育相談では、子どもの成長を支える親子の関わりについて、具体的な関わり方や個々の親子に応じた支援などの検討を重ねながら、グループ活動や個別指導に取り組んできた。本稿では、親子の関わりについて検討してきたことや実際の場面で見られた親子の様子などをまとめ、保護者支援においてどのような視点が重要になるのかを考察する。

キー・ワード：乳幼児教育相談　保護者支援　親子の関わり

1　はじめに

乳幼児期の子どもが心身共に成長していくために、最も身近な存在である保護者の関わりは大きなものとなる。日常の生活や遊びの中で、保護者と関わりながら、子どもが安心して心地よく楽しく過ごすこと、いろいろな体験の中で親子で様々な気持ちを味わうこと、やりとりを通して働きかけられたことを理解したり自分の思いを伝えようとしたりすることなどが、コミュニケーションや言葉を育んでいく上で土台となっていくと考える。

本校乳幼児教育相談（通称：けやきルーム）では、親子の関わりを育んでいくことを大きなねらいの一つとして日々の活動に取り組んでいる。グループ活動や個別指導を通して、実際の場面で子どもとの関わり方や言葉のかけ方などについて具体的に保護者に支援を行っていくことを大切にしている。

より適切な支援を行っていくために、親子の関わりではどのようなことが大事になるのか、それぞれの親子に対してどのような支援が必要なのか、担当者同士で情報交換をしたりビデオで活動の様子を見たりしながら、日々検討し取り組んできた。

本稿では、年度当初に担当者で検討した内容、実際の場面で見られた親子の様子、実際の支援、グループ活動のビデオをもとに話し合ったことなどをまとめ、親子の関わりについて保護者支援においてどのような視点が重要になるのかを考察する。

2　基本的な支援のあり方についての検討

新年度になり乳幼児教育相談の担当者も数名が入れ替わった。年度当初の４月は、昨年度からの担当者と新たな担当者と共にグループ活動や個別指導を行った。４月末に１ヶ月間の活動を振り返り、子どもの様子や保護者の関わり方などについて話し合い、支援のあり方について検討を行った。以下のような内容について、担当者全員で共通理解を図った。

・保護者自身が取り組めるようにする

乳幼児期は、子どもの気持ちに応じながら親子で楽しく遊んだり、身の回りの一つひとつのことを親子でやりとりしながら取り組んだりすることが大事な時期である。

担当者は、実際に子どもと遊んだり関わったりしながら、どのように子どもの気持ちに応じたり身の回りのことを促したりしていけばよいか、どのように働きかけると子どもが理解するかなどについて、保護者と相談しながら取り組んでいく。

ここで大事にしたいことは、保護者自身に実際に取り組んでもらうということである。担当者自身も、子どもと関わる中で子どもの実態を掴んだり関わり方を示したりする必要があるが、保護者自身が「子どもと遊んで楽しい。」「こうやったら子どもができた。」と実感する経験を積み重ねていくことが大事である。

・親子の関わりを見守る

親子で楽しく遊べていないときや、何かしようとする場面で子どもがなかなか取り組もうとしないときに、担当者が遊び方を示したり子どもに促したりしたりすることがある。

しかし、すぐに担当者が間に入るのではなく、まず親子の関わりを見守ることが大事である。乳幼児期の子どもは何か働きかけてもすぐに応じないことがあったり、何かの拍子に気分が変わって取り組んだりすることもある。親子で遊ぶときに、はじめは子どもがじっと見ているだけですぐに楽しまないようなことがあっても、何回かやっているうちに楽しくなったり遊び方がわかったりして遊び始めることがある。また、子どもがすぐに取り組まなくても、保護者自身が言い方を変えて伝えたり子どもの気持ちに応じて関わりながら促したりすると、最後には取り組むこともある。

このように、保護者自身が試行錯誤を繰り返しながら子どもと取り組むことで、親子の関わりが深まることにつながっていく。担当者は、そのやりとりの過程をよく見て、必要に応じて助言をしたり関わり方を示したりすることが大事である。

・声かけや働きかけが重ならないようにする

聴覚に障害のある子どもにとって、複数の人から同時に声をかけられたり働きかけられたりすると、きちんと声や言葉を聞き取ったり言われていることを理解したりすることが難しいときがある。

親子の関わりの中では、保護者が、子どもにわかるように働きかけているか、子どもが声や言葉を聞き取れるように声の大きさや話す速さに気をつけて話しているか、穏やかにゆったりと関わっているか、といったことが大事になる。

こうした親子の関わりを培っていくためには、静かな環境の中で親子でしっかりと向き合って関わる経験を重ねていくことが必要となる。親子で関わっているときは、保護者と同時に子どもに声をかけないようにし、やりとりが一区切りしたところで子どもに働きかけるようにすることが大事である。

3　実際の場面での親子の関わりと支援

グループ活動や個別指導、活動以外の時間など、実際の場面で見られた親子の関わりや担当者が行った支援について、担当者同士でその都度報告をし合い情報交換を行ってきた。その内容は多岐に渡るが、ここでは特に親子の関わりで大事になる点で特徴的なものについて述べる。

・子どもと同じ動きをして遊ぶ（２歳児）

子どもが電車のおもちゃを両手に持って、四つん這いになりながら床を走らせて楽しんでいた。保護者は子どもが遊んでいるのを笑顔で見ていたが、親子で関わって遊ぶ様子は見られなかった。そこで、保護者に子どもと同じ動きをして遊ぶようにしてもらった。すると、子どもの方からお母さんの顔を見て目を合わせてニコッと笑顔になる瞬間がたくさんあり、楽しい気持ちを親子で味わうことができた。

このように、子どもがしている動きと同じようにして遊ぶことで、子どもが自分の楽しんでいることを保護者がわかってくれている、一緒に楽しんでくれている、という思いをもつ。そうした思いを育んでいくことで、子どもの人と関わりたい、伝えたいという気持ちが育ち、コミュニケーションの基礎が培われていく。

・子どもの気持ちに応じて働きかける（２歳児）

２歳児のグループ活動では、朝登校してきたら親子で朝の支度をしている。朝の支度は、自分のかばんからタオルを出して手を洗い、出席シールを貼るカードを所定のところに入れ、ロッカーにかばんをしまうという一連の流れで、親子でやりとりをしながら取り組んでいる。

ある日の朝の支度の場面で、子どもが家から持ってきたお気に入りのメモ帳をかばんにしまわせようと保護者が何度か声をかけていた。子どもはそれを嫌がり、メモ帳を片手にタオルをかけたり出席カードを入れたりしていた。しかし、子どもは朝の支度が一通り終わると自分でメモ帳をかばんにしまってから遊び始めた。

子どもは、保護者からしまうように言われたことがわかっていてもすぐには手放すことができず、朝の支度が済んで遊び始める段階になって、やっとしまおうという気持ちになれたようであった。保護者も、しまわせたいと思いながらも無理にさせるのではなく、その子の気持ちに付き合いながら関わっていた。その結果、保護者は子どもをほめることができ、子どもも満足して親子で楽しく遊び始めることができた。

自分の思いが強くなってくる時期には、親子の関わりがすんなりと進まないことも多くある。子どもがこうしたいという思いをよく汲んで、その思いを認めながらうまく導いていくことが、親子の関係をより深めていくことにつながっていく。

・子どもの成長に合わせ関わり方を変えていく（２歳児）

１歳児の頃、保護者がトイレに行くなどして近くにいないと、不安に思い泣き出す子どもがいた。２歳児になり２学期に行われた保護者講座のとき、その子は不安に思いながらも保護者と離れて別室に向かい、保護者も子どもが別室で遊んで待っていられるか心配していた。そこで、子どもを保護者がいる部屋に連れて行き「お母さんはここにいるよ。」と話すと、目に少し涙を見せながらも再び担当者と別室に向かった。離れられないのではないかと心配していた保護者も、子どもの気持ちの成長を喜ぶと共に、きちんと話をするとよくわかるようになったのだと感じることができたようである。

それぞれの子どもの性格や特性などによっては、保護者自身が子どもの成長している部分に目を向けられず、成長に合わせて関わり方を変えていくことができない場合もある。その子どもの成長している面を引き出し、できる経験を見せていくことも大切な支援となる。

・わかりやすい動きや表情で関わる（２歳児）

天井からゴム紐で吊したビニールボールで遊ぶのが好きな子どもがいた。子どもが投げたりたたいたりしたボールが担当者に当たったときに担当者が「わあ。やられたー。」と言って大きく倒れてみせると、子どもは声をあげて笑い、何回も繰り返し楽しんで遊んだ。しばらく担当者と楽しんだあと、親子で同じようにしてやってみると、親子で笑い合って楽しむことができた。その後、家庭でも親子で楽しく遊ぶことが増えたようである。

子どもが楽しんでいるときに、大人が「やったー。」「おもしろいね。」など、言葉だけで言っても気持ちが伝わらないときがある。それらの言葉と共に、動きを大きくして見せたり表情を豊かにして働きかけたりすると、一緒に楽しんでいる気持ちが子どもに伝わり、子どもはより楽しくなり一緒に楽しく遊ぶことができる。子どもが目で見てわかるように気持ちを伝えていくことが、人との関わりを育てていくことにつながる。

・子どもの遊び方に応じて関わる（２歳児）

子どもが遊んでいるときに、楽しんで遊べるように大人が「これはどう？」といろいろなものを出すことがある。それが子どもの楽しんでいることと違うと、遊びが噛み合わないことがある。

まだ遊び方がわからない時期は、大人が楽しく遊んでみせることが必要となるが、子どもが自分で遊び方を考えるようになってくると、子どもの遊びに合わせて応じていくような関わり方が望まれる。子どもが遊ぶ様子をよく見て、子どもなりの発想を認め一緒に楽しんで遊ぶといった関わりの中で、子どもは自分の思っていることが大人にわかってもらえているという気持ちをもつことができる。

・子どものしていることに合わせて言葉をかける（１歳児）

補聴器をつけられるようになりしばらく経つと、言葉がなかなか出てこないことに不安をもつ保護者も多くいる。

自由遊びのときに、保護者が「くるまは？」などと子どもの言葉の理解を確かめるような声かけを多くしている場面があった。そのとき子どもはプレイ

ルーム入口の引き戸を開け閉めすることを楽しんでいた。そこで担当者が、保護者に「ガラガラ」と子どもに声をかけてみるよう促すと、子どもも引き戸を開け閉めしながら「ガラガラ」と同じように言っていた。

子どもの言葉を育てていくには、子どもの気持ちやそのときの状況に合った言葉をかけていくことが大事である。子どもが何を見て何を思っているのかをよく捉え、それに応じて適切な言葉をかけていくことが望まれる。

・楽しい関わりの中で補聴器をつける（０歳児）

補聴器をつけるのを嫌がり、家ではつけない子どもがいた。保護者も、音や声を聞かせるために補聴器をつけさせたいと焦るが、一向に補聴器をつけられない日々が続いた。

その子どもは、グループ活動の中で、保護者に抱っこされてピアノの音を聞きながらリズムを取る活動を楽しむ様子が見られた。そこで、個別指導のときに別の担当者にピアノを弾いてもらい、子どもが保護者に抱っこされている状態で、担当者が片方だけ補聴器をつけてみると、少しの間つけていることができた。

その後のグループ活動や個別指導の中でも、同じようにして担当者が補聴器をつけることを繰り返してきた。学校でつけることに少しずつ慣れてきた頃、子どもが好きな遊びに夢中になっているときに、保護者につけてみるよう促したところ、補聴器をつけることができた。その後、学校でつけることに抵抗を示さなくなってきたのと併せて、家でもつけるようになってきたようであった。

補聴器の装用をすすめていくにあたっては、ただ補聴器をつけるのではなく、親子の楽しい関わりの中で補聴器をつけ、周りの人の楽しそうな声を聞いたり様々な音を楽しんだりすることが大事である。補聴器の装用がなかなか難しい子どもに対しては、学校での活動の中でそうした状況を設け、少しずつでも取り組んで装用のきっかけを作っていくことが必要である。

・繰り返し同じ遊びをする（０歳児）

子どもと遊ぶことに自信がもてない保護者もいる。ある保護者は、あやしても子どもがなかなか笑ったり喜んだりしないという悩みをもっていた。学校でも、１回やってみて子どもの反応がないと、それ以上働きかけない様子もみられた。

そこで、歌を歌いながら親子でふれ合う遊びを活動に取り入れた。その中で大事にしたのは、同じ遊びを何回か繰り返すことであった。１回目は「何かな。」という感じの表情だった子どもも、２回、３回と繰り返すうちにだんだんと楽しくなってきて、くすぐられるのを喜んだり、くすぐられるのを期待して構えたりする姿がみられるようになった。

あやしてもすぐには喜ばないこともあるので、子どもがわかり楽しめるよう何回か繰り返したり、子どもが喜ぶ遊びをしばらく続けてみたりすることが大事である。同じことの繰り返しではあるが、保護者が楽しませてくれることを子どもがわかり、またやってくれると期待する気持ちをもつということが、親子のコミュニケーションにつながっていく。

・子どもの指さす方へ動いて行ってみる（０歳児）

子どもは、気づいたことやしたいことがあると指をさすようになってくる。ときには離れたところにあるものに気づいて指をさすこともある。そのときに「〇〇だね。」と声をかけるが、言葉だけではどれのことを言っているのか子どもに伝わらないことが多い。また、子どもが指さしているものが保護者の捉えたものと違っている場合もある。そこで、実際に子どもを抱っこして指をさす方へ連れていき、近くでそのものを見たり触ったりしながら話をすることが大事である。

グループ活動でも、子どもが指さしをしたときに保護者が実際にその場まで一緒に行って応じるということをしたところ、子どもが声をよく出したり指さししたりすることが増えた。子どもは自分が思っていることを保護者がわかってくれるということが実感でき、さらに伝えたいという気持ちも広がったのではないかと思われる。

・前向きな気持ちで補聴器をつける（０歳児）

聴覚に障害があるとわかると、コミュニケーションをとったり言葉を育てたりするために、早く何かをしてあげたいと焦る保護者も多い。補聴器をつけることもその一つであるが、中には家ではなかなか補聴器を長くつけられない例もある。グループ活動でそのような悩みをお互いに話し合ったときに、自分だけではないのだと思い頑張ろうという気持ちになったと話す保護者がいた。また、補聴器を試聴しているときはなかなか前向きにつけることができなかった保護者も、補聴器購入後自分のものになってからは意識も高まり、補聴器が長くつけていられるように子どもと楽しく関わる時間を増やすようになった。

補聴器をつけなくてはと焦ってしまう気持ちがあるとなかなかうまく装用がすすまないケースも多い。やはり親子の楽しい関わりの中で補聴器をつけるという前向きな気持ちで装用をすすめていくことが望まれる。

・楽しいと思って子どもと関わる（００歳児）

聴覚に障害があるとわかったことの不安と共に、子育て自体に不安を抱えている保護者も多い。コロナ渦の現在は、児童館などにもなかなか行けず、同じ立場の保護者と接する機会も限られたものになっている。

そうしたこともあり、グループ活動ではお互いに何気ない子育ての話をすることが大きな力になったという声がたくさん聞かれた。

２学期の保護者面談のときに、グループに参加して活動した感想を聞くと、「楽しかった。」と答える保護者が多かった。また、兄弟がいる家庭では、学校ではゆっくりと子どもと関わることができてよかったと話す方もいた。同じ立場の保護者や子どもと一緒に活動することで補聴器をつけよう、顔を見て関わろうという気持ちになったという保護者もいた。

グループ活動でみんなで一緒に楽しく子どもと関わることがきっかけとなり、家での親子の関わりにつながっていったようである。

4　ビデオによるグループ活動の場面での親子の関わりの検討（１歳児）

１０月と１１月にそれぞれ違うグループについて１歳児グループの活動をビデオに撮り、子どもの様子や保護者の関わり方､担当者の支援などについて、担当者全員で具体的に検討した。親子の関わりについては、以下のようなことが話題になった。

・子どもの気持ちに応じて関わる

子どもがぬいぐるみを指さしているときに、「あ、〇〇いた。」と気づいて指しているのか、「取って。」と思って指しているのか、よく気持ちを捉えてそれに合った言葉をかけていくことが大事である。

友だちが遊んでいるものに手を出したときなどは、すぐに止めるのではなく様子を見守り、子どもの動きに応じて関わる。子どもが今どのような気持ちでいるのかということをよく見て、それぞれの保護者が「貸して。」「一緒に遊ぼう。」「いいよ。」「いや。」「あとで。」「待ってて。」などと、そのときの子どもの気持ちに応じて関わるようにする。

・子どもの動きに合わせて動く

子どもは、気づいたことやしたいことがあるとどんどん自分から動いていくようになる。子どもの動きに合わせて保護者も一緒について行くとよい。

グループ活動では、みんなでの活動に飽きたり他のものに目がいって活動から外れたりするときがある。保護者も一緒に行き、その子どもの気持ちを認め一緒に楽しみながら、また活動している様子に目を向けさせたり参加するよう促したりする。

・子どもができるように促す

子どもがなかなか玄関に入ってこないような場面では、まず保護者が先に入って挨拶をしてみせるとよい。また、積木を積んで倒す遊びで、子どもが積木を倒そうと思っているがなかなか手が出ないようなときに、保護者が手を添えて一緒に押してあげることで「自分でできた。」という達成感を味わわせていた。

片付けの場面では、片付けをしつつ新たな玩具を見つけ遊び始める子どももいる。「おもしろいね。」「かっこいいね。」などと子どもの気持ちを受け止めて言葉をかけたり少し一緒に遊んであげたりしながら片付けを促していく。一つでも自分で片付けたときに、その都度ほめるようにする。

・子どもから見えやすい位置で関わる

補聴器や人工内耳を通して、コミュニケーションをとったり言葉を聞き取ったりすることができるようになってきた子どもの場合、保護者が子どもの後ろや上の方から話しかけたり関わったりする場面も見られる。

聴覚活用の様子に関わらず、子どもが何かに気づいたり保護者に伝えようとしたりするときに、保護者が子どもから見えやすい位置にいた方がよい。また、確かなコミュニケーションの姿勢を身につけていくためにも、親子でお互いに顔を見合って関わることは大事なことである。

・子どもがわかるように話しかける

子どもに話をするときは、子どもが十分受け取れるような早さで話しかけたり、子どもがどれくらい理解しているのかを確かめたりしながら、子どもにわかるように伝えることが大事である。

一度言っただけでは、聞き取れなかったり理解できなかったりすることがあるので、同じ言葉を繰り返してかけるようにする。

また、子どもが興味をもつように、動きや声の大きさ、表情を工夫して関わるとよい。

・子どもの気づきや行動に合わせて声をかける

手洗い用のハンドソープが無いことに気づいた子どもがいた。子どもが気づいたことには、どのようなことにも応じて話をするようにする。

また、名札をつけるときに「〇〇ちゃんの名札どれかな。」「どこにつけようか。」「名札つけたよ。オッケー。」など、何気ないことでも一つひとつ必ず声をかけながら子どもに働きかけるようにする。

・動きや視線を捉えて関わる

子どもによっては、友だちが楽しんで遊んでいるのをじっと見ていることがある。「〇〇ちゃん、～して遊んでいるね。」「おもしろそうね。」などと、その様子を話すようにする。また、一緒にやりたそうに見ているときには「入れてって言ってみようか。」と誘ったり、友だちが遊び終わってからやってみたいと思って見ている子どもにはそのあとで一緒に遊んだりするなど、そのときどきの子どもの視線や動きを捉えて関わっていく。

5　まとめと今後の課題

子どもの成長を支える親子の関わりとして大事になることについて、乳幼児教育相談担当者で年間を通して検討してきた。日常的に情報交換をしたり、折に触れてあらためて支援のあり方を見直したりする中で、その都度共通理解をしながら保護者支援にあたってきた。

そうした話し合いを通して、保護者の中には、前向きに楽しんで子どもと関わることが難しい、取り組んでいることに自信がもてない、うまく関わることが難しく成果を感じられないといった方がいることも話題に上がった。親子の関わり方として基本的に大事になることはあるが、子どもの実態や保護者の思い、家庭の事情などによりそれぞれ関わり方が異なってくる部分もある。担当者はそのことを考慮し、それぞれの親子にとってどのような関わりが必要なのか具体的に示し支援していくことが望まれる。

今後は、今年度検討してきたことを基にして、さらによりそれぞれの親子に応じた支援ができるよう努めていきたいと考えている。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。